

公開講演

自伝—東と西—

Autobiography: East and West

佐伯彰一*

It seems to be assumed that the autobiographical genre has been the specifically European product, even the cultural 'institution' of modern Europe. Even today most of the Western (European & American) scholars and critics tend to take this view for granted, and their sometimes voluminous studies of autobiography have been almost exclusively concerned with the European tradition, which, I admit, do and did exist. However, is this assumption so totally acceptable? Could we not find any other area where the remarkable autobiographical writings have been produced?

We must not overlook that some of the European autobiographies have been intensely influential upon the modern intellectuals in several other areas of the globe. Indeed it could be contended that the emergence of the remarkable autobiographies in a certain area or country should be taken as the potent index to the modernization of that specific area or country. Modern Japan has produced various conspicuous autobiographies, most of them being written by 'modernized' intellectuals, or even by the

* SAEKI, Shoichi 中央大学文学部教授、東京大学名誉教授

pioneering activists of 'modernization'. Similar examples could be found in China, Malaysia, and India. Most of the Asiatic leaders of 'modernization' happen to be the authors of the memorable autobiographies.

However, let us turn to pre-modern Japan. We come across tremendous output of the autobiographical writings, totally free from the European influence, and yet so impressive. In 'Heian' Japan we find various attractive female diaries, most of which turn out the life histories rather than daily records of the woman authors. In medieval Japan, we have the superb autobiography of Lady Nijo and readable reflections upon personal life by the male hermits. Coming to Edo period we are amazed to find the rich variety in the status and profession of the autobiographical writers. There were, of course, excellent samurai autobiographies, but also the kabuki actors, merchant-scholars, and even wandering priest have written charming autobiographies. Surely we can speak of the Japanese tradition of autobiography.

So we had better stop accepting the European assumption and try to get broader, more well-balanced perspective upon the autobiographical genre. I am sure the East should have much more to offer and contribute. Here is an important literary sphere, where East and West could cooperate more fruitfully for the 'universal' understanding of literature.

ただ今、金先生の近代性をテーマにした興味深いお話しがありました。

普通には、「近代」はヨーロッパの専有物で、東洋はそれを学んだり真似したりしただけだと思われがちです。が、実はそうではない。東洋にも近代の芽はいろいろな形であったという点を指摘されたと思います。私の話もこの同じテーマを別の角度から展開することになるだろうと思います。

今日はちょうど好いお天気で、これは西高東低の冬型の気圧配置によるのだそうですが、自伝ジャンルというものを考えて見ますと、今までの考え方はまず圧倒的に西高東低になっております。自伝というものは、今文学批評ではやりの言葉を使えば European 'institution'すなわちヨーロッパで生れた「制度」であって、東洋や他の地域はそういう「制度」を借りて、後にやり始めたが、基本の枠組を作ったのはあくまでも西洋である。これがごく普通の考え方であります。残念ながら東洋人も大概そう思っております。有名なインドの政治家、というよりは spiritual leader とでもいうべきガンジーに面白い自伝がありますが、その序文に、彼が自伝を書き始めると、彼が尊敬していた先輩が心配して、「自伝など書くのは止め給え、自伝はもともと東洋人の書くものではない。西洋人の真似をすることはしない。しかもあなたは政治指導者で、自伝の中で政治のことを語り、後にそれを訂正するようなことになる」と、同志達がたいへん迷惑する」と言ったと書かれています。古来インド人は自信が強い民族だったと思うのですが、そのインド人さえ自伝は西洋のものと言い切っているのです。

さらに日本で一番古い文学史、—或いはもう少し遡ることも可能かも知れませんが—まず最初といってもよい『日本文学史』という書物を、1890年に当時まだ若い歴史家の三上参次氏と高津鞆三郎氏が協力して出しました。その中にもやはり「東洋に自伝なし」という一句が出ております。それは新井白石の自伝を紹介論評した箇所で、「たとえば平安朝に日記というものがあるが、残念ながら自伝までは成長しないままに終って、本当の自伝は日本には無かった。ところが白石は本格的な自伝を書き上げた。」といった趣旨のこと

を述べています。したがってここでも一般には自伝は西洋のものだとされていた訳です。

なるほど自伝という言葉自体は英語の *autobiography* の訳語として広く使われ出し、フランスやドイツの場合でさえもほぼ英語を訳す形でそれぞれの国語で使っています。確かに西洋、特に近代になって自伝というジャンルが意識されて来たことには間違いのないようです。

西洋の学者で自伝研究を古くからした人の一人にドイツの *George Misch* という人があります。彼は哲学者の *Wilhelm Dilthey* の弟子で女婿でもあります。ほとんど全生涯を捧げつくして三部八巻の自伝研究の大著を著しました。しかし残念ながら東洋のことは、彼の膨大な研究の中にもほとんど全く出て来ないのです。自伝研究は1960年代の終り、或いは70年代には入ってからフランス、アメリカを中心にして急に盛になって来たのですが、それらの研究書の大方を見ても東洋の問題、ヨーロッパ以外の地域の自伝伝統の問題はまるで無視されています。ですから自伝ジャンルは「ヨーロッパの制度」ということはほとんど暗黙の *assumption* として広く受け入れられて来たと言いついてよいと思います。

しかし果してこうした大前提は正しいのかどうか、いや、この大前提は根本的に再検討されるべきだというのが私のテーマであって、むしろそういう西欧的の偏見にチャレンジしたいというのが今日の講演の基本の主題でもあります。

ところが、偏見というものはそれなりの根拠があるものであって、ざっと眺めますとやはり偏見がもっともだという実例も非常に多いのです。それを三つに分けてお話しします。

自伝というものを各国について眺めますと、自伝には近代化のシンボルともいべき要素があるようです。現に日本の近代の代表的自伝というのを挙げてみますと、まず福沢諭吉の『福翁自伝』、それから対照的な内村鑑三の“*Why I became a Christian*” という二つの名があがるでしょう。『福翁自

伝』は大へん見事な、生き生きした語り口の自伝ですが、背後にはやはり自ずとアメリカのフランクリンの自伝の影を見逃がすことができません。経歴が似ているだけでなく書き方や語り口でもフランクリンからかなりの示唆を得たようで、それがモデルとして念頭にあっただろうと考えられます。内村鑑三の場合は御承知のように始めから英文で、英語国民に向って語りかけようとして、Pagan（異教徒）である自分が如何にしてキリスト教に改宗したか、ということにテーマをしぼっております。こういう narrative of conversion、宗教的な転向の物語というのは、まさに西欧の自伝の中核を成すもので、St. Augustine 以来あるいは例の『天路歷程』で知られる John Bunyan など十七世紀になって特に数が多くなった信仰自伝の一つの variation に他ならない。というわけで、そうするとどうも日本人も近代になってヨーロッパの自伝を読むことで、これに刺激されて自伝を書こうという気になったらしいと認めざるを得ないのです。

この二人以外にも自伝を書いた人は明治以後ずい分おります。拙著『近代日本の自伝』（講談社）の中にもありますが、たとえば実業家の代表である渋沢栄一が書いた『雨夜譚』は、明治維新前後の彼自身の経歴が大変生き生きと語られています。それから日本の郵便システムを確立した前島密も、明治前から明治へかけての自分の青春期を生き生きと書いた『鴻爪痕』という自伝を残しています。また日本の実業家あるいは政治家として大きな業績を残した高橋是清、彼は初め奴隷としてアメリカへ売られて行ったのですが、やがて日本の大蔵大臣となって財政を引き回すに至ったという劇的な生涯を自伝の中で語っています。

このように見ますと、近代化の推進者、あるいは近代西欧と直に接触した人、近代化の実行に携わった人が、例外なく自伝を書き残していると認めざるを得ません。これは日本ばかりに留まらず、アジアの諸国を眺めると、先程インドのガンジーの例を挙げましたが、ガンジーの後継者であるネルーも、彼はイギリスでパブリック・スクールから大学まで教育を受けただけあって、

実に端正で見事な British English で大冊の自伝を書いています。その中には、日露戦争で日本が勝利したことに彼はアジア人としてたいへん興奮を覚え、それが彼の後の独立運動の一つの胚種ともなったという記述も出ています。またマレーシアでは、十九世紀の半ば頃既にアブドゥッラーという人が、マレー語で『アブドゥッラー物語』という自伝を残していて、全部ではありませんが翻訳刊行され平凡社の東洋文庫の中にはいつています。この人は、マレー・シンガポール辺りのイギリスの植民地化を推進した例の辣腕のラッフルズの秘書として働いた人で、この際近代化は同時に植民地化に直結した次第でしたが、とにかく近代化に積極的に参加したマレーシア人であり、その彼が自伝を残していることは象徴的といえましょう。

さらに、中国は膨大な文学伝統を持っている国ですが、自伝においても、大歴史家の司馬遷が『史記』の後書きの形で、「太史公自叙」という自伝を書き、いかにして自分は『史記』を執筆するに至ったかという劇的な事情を自ら述べています。『漢書』の班固もやはり自叙の形で自伝的文章を残しています。このように歴史家が自伝を書くということは中国でかなり習慣化していたらしいのですが、それにもかかわらずそれが他の領域に広がらず、あの膨大な中国文学史においても、自伝的な作品は近代までは案外少ないのです。近代的な中国自伝のはしりは容閔^{ヨウミン}という人がやはり英文で書いた“My Life in China and America”です。彼は1809年 missionary の世話でアメリカへ行き、エール大学を卒業した最初の東洋人です。彼はどうやら近代化し過ぎ、アメリカナイズし過ぎたせいか、中国へ帰っても働き場所が見つからず、晩年はまたアメリカにまいもどり、アメリカの白人女性と結婚しコネチカットで生涯を終えました。これはまた象徴的な成り行きといえましょう。歴史家の胡適も自伝を書いています。胡適の自伝が出るのは1920年代の終りですが、郭沫若その他の人の近代自伝がどんどん輩出するのは1930年代の出来事です。これらは、いずれも、ある意味ではイデオロギー的、反封建主義的、あるいはさらに強烈な形で近代化を推し進めようとした左翼思想の影響が非常に強

く出ていて、中国における近代化の衝動というか、modernizing impulse の波が高まった時期に一せいに輩出したものです。

アフリカ等他の地域でも、最近になって近代化が推し進められると、そのリーダー役をつとめた人々が自伝を書き残す事が、相次いで行われているという事例もみつかります。こう考えて来ると、いよいよ西高東低で、われわれはすっかり西風に圧倒されているのではないかと思われませんが、こういう気圧配置を一変させるような要素がうまい具合に見つかる。それが日本の文学史です。日本という例外があるということをおれわれ日本人として力をこめて御報告申し上げたいと思います。

日本の自伝としては先程の三上、高津両氏の先駆的な文学史の中でも既に言及されておりますように、まず十、十一世紀の平安朝の女流日記があります。しかし、この両氏の文学史は、当時日本にも入って来て大いに力を奮った一種の文学的進化論の傾きが強い。つまり、日記が進化して自伝になるべきだ、だから日記は自伝の前段階的なものに過ぎないという段階的な考え方に囚われていて、平安朝の女流日記を正確に評価しかねていたように思われます。

平安朝の女流文学は、「日記」と名乗っていて、初めは確かに日記の形になっているものもありますが、全体として見ると、もっと広い perspective をもっていて、その書き手の生涯全体を捉え、おのずと書き手の生き方総体のイメージが浮んで来るものが多いと思います。しかも非常に特徴的な事は、例えば『蜻蛉日記』の作者にしても、或いは『更級日記』の作者にしても、何とかの母とか、何とかの娘という形で残っていて、本名もわからないわけです。そういう全く無名の女性が、それ程劇的な事件があるわけでもないのに自分の一生を敢て記録しているのです。無名という事とつながって、彼女等の生活の主な内容は、家庭生活であったり、殆んど純粹にプライベートな aspect だけがそこに扱われていて、公的なものはほとんど全く姿を見せないのです。

そこには、十、十一世紀の女流の書き手によって、純粹自我 (pure ego) とでもいうべきものが文学的結晶にもたらされたという驚くべき証據が残されているわけです。さらに面白いことは、当時の日本人は、日記が文学であるという事をいささかも疑わなかった様で、少くともこれを文学作品として逸速く認め、狭いサークルでお互いに読み合い、それがまた古典として後代にずっと伝えられたという事実です。だいたい日記或いは自伝的なものが文学的ジャンルだと実質的に認められるのは、ヨーロッパでは、ずいぶん長い時間がかかったのです。ざっと言って、これは十八世紀末のロマン主義以後の話であります。それが殆んど無意識の内に平安朝の日本で達成されたという驚くべき逆説にわれわれは出合うのです。

それでは、平安朝はきわめて特殊な時代であったから、特殊な条件、すなわち、非常に狭い、血縁的に近い人ばかりで成り立っていた、いわば文学的エリートの温室の様な条件のもとで成立したのかと考えて、中世を眺めると、そこにも自伝は引き継がれていて、女流では、英訳者の言い方を措りれば Lady Nijyo の『とはずがたり』があり、これは女流自伝の世界的傑作といって間違いないものです。彼女は天皇の mistress でしたが、なかなかエロチックな発展家で、いろいろな人と、最後には僧侶とさえも恋愛をし、そういった自らの性的な冒険を、たいへん生き生きとした筆致で書いていて、しかもいささかも曝露的でないのです。後年は女西行と呼ばれたように、彼女は自分の性的生涯を超越し、さらりとした detachment (とらわれぬ態度) をもって、自分の過ごし方を振り返り、その中には emotion が豊に溢れていて、自分の恋人を“雪の曙の君”などとロマンチックに呼んだり、シャレツ気も持ち合わせた人なのです。

これのみならず中世には、御承知の様に、隠者による随筆、紀行があり、『方丈記』の如き、自分のささやかな山荘の話をしながらか、それは時代史、社会史でもあれば、同時に彼自身の spiritual autobiography にもなっています。そういう宗教的な内面的自己省察というものが、中世文学の大きな特徴

ですが、さらに紀行文の形の中にも、自伝的要素が濃厚に流れていて、そういう *spiritual* な内面化が、中世の日本を通じて行なわれた事は明白です。

次に三番目として近世を眺めると、この時代の特徴は、自伝的作品が非常にバラエティを増して、凄い勢で多様化したことでしょう。その中心は当然日本の主導権を持つ武士で、サムライによる自伝に実に優れたものがあります。長くなるので名前だけ挙げるに留めますが、例の赤穂の四十七士と関係があることで有名な山鹿素行の『配所残筆』、それから新井白石、松平定信、私はこれらを侍自伝の三部作と呼んで来ました。最近ハーバード大学で *ph. D.*を取った日本の女性が松平定信について面白い研究をされたのですが、定信自伝は、「キタ・セクスリアス」と言ってもよいような自分の性的体験を、隠さずはっきりと書いており、大名の性生活が鮮かに浮んでくる。しかも性であるだけでなく恋愛にもなっていて、月の下で自分の愛する侍女と散歩をした話、さらに彼が本当に好きな美女がいて、手に入れたいが意地の悪い女性なので、関係すると困ったことが起りそうだからと我慢していると、或る晩家来が気を使って彼女を定信の *bed room* に送り込みます。それを即座に断ると相手を傷つけると思ったのか、床に導き入れはしましたが、彼女に女の心得などを語りきかせて一晩無事に過したと、そう書いてあります。侍自伝といってもこの様な要素まではいっています。

さらに歌舞伎俳優の初代中村仲蔵という人が「*Colloquial Edo Dialect*」とでもいったじつにくだけた文体で、俳優修業のつらさを生き生きと語っています。三代目仲蔵も、地方巡業でどれ位給料をもらうか、「ゴマのハイ」がどれだけはびこっていたか、地方で何を食べたか、など地方生活の記録を豊富に語っています。俳優の生活では自己演技の意識が当然発達するでしょうから、西洋でも古くから自伝ジャンルの中でも大変ユニークな一分野を成しています。そのほかに『北越雪譜』という雪の記録を詳しく書き残した越後の鈴木牧之の書いた自伝があります。彼は地方の町人学者ですが奥さんを五、六回も取り替えている。たいへん頑張り屋で努力家だけれど、付き合ったら

やり切れないようなしつこい一面も持っていることが自伝を読むとじつによくわかります。それと対照的に、勝海舟の父の勝小吉というやくざ侍というか、ボヘミアン侍というか、喧嘩の方が商売のような人がおりますが、江戸末期の侍がそうならざるを得なかった事情も自伝を読むとよくわかります。それから金谷上人、この人は放浪の僧、ヒッピー坊主とでもいった人物なのですが小説のような自伝を書き残しています。江戸時代には旅行が非常に盛になりますので、女性の手になる紀行文もたくさん書かれ、それには自ずと自伝的な要素もたっぷり盛り込まれています。従って自伝としての紀行文学、或いは紀行自伝というのも系統的に調べれば、日本文学の中でひとつの特徴として位置づけることができるかと思えます。

こうしてふり返って見ますと、日本文学に一貫した自伝伝統があることはどなたにも、ほぼお認め頂けると思うのですが、それではヨーロッパの堂々たる自伝伝統と、日本のそれとを比べるとどうなるかという問題が生じます。「東と西」という際には、じつは、韓国や中国、あるいは東南アジアなども含めてもっと材料を集めなければなりません。rough and ready generalizationとしてここでは一応日本とヨーロッパを比べて見ますと、まづ第一に目立つのが宗教の問題です。先程も申し上げました様に、ヨーロッパの場合、自伝といえは殆んど誰もがアウグスチヌスのものを筆頭に置くというように、ヨーロッパに於ける宗教的自伝、告白自伝の伝統は実に根深く一貫しています。中世は、特にゲオルグ・ミッシュが詳しく研究していますが、彼は初め中世などに自伝はないだろう、古代を調べればすぐ近代に行けるだろうと思っていました。所が、調べてみたら案外多く、彼の自伝研究は中世の部分が大きく脹らんでしまって、肝心の近代の部は、原稿のままに残り、弟子があわててまとめて本にしたという程です。

『アベラールとエロイズ』で有名なフランスのアベラールに自伝があります。彼は十一世紀から十二世紀の人ですが、十二世紀にフランスのノージャ

ンにいたギベールという僧も、注目すべき自伝を書き残しています。

中世自伝は、ラテン語などができないとは入って行けない領域なのですが、幸い近頃英訳がいろいろ出る様になって来て、段々様子がわかって来ました。これは簡単に自伝とは言えませんが、泥棒詩人で有名な中世のフランスのフランソワ・ピヨンの詩には、「遺言書」と見なされたものがありますが、泥棒と放浪に明け暮れた自分の生涯を、詩の形で、ある意味では率直に後世に書き残しています。そういった詩の形での自伝というものも中世にはあった訳です。

自伝の第三の高波はやはり十七世紀です、ここではカトリックのような懺悔、告白、の制度を持たないプロテスタントによって、膨大な数の無名の信者の信仰の日記、*spiritual autobiography* が書かれています。特にイギリスとアメリカが、その主な産地となりました。クェーカー教徒などには、無数の自伝があるというアメリカの研究者の報告がありますし、マニユクリプトのまま残っているものも、ある研究者が二百点位をあげています。近代では誰でもルソーの“Confessions”をすぐ思い浮かべるのですが、告白というキリスト教的題名を付していますし、自分が最後の審判に呼びだされたら、この本を持って神様の前に出ていくのだということも言い切っていますから、一見宗教と関係のない様なルソーの自伝の中にも、宗教的骨格は、やはりまぎれもないのです。そういう宗教の骨格を借りながら、世俗的な、或は性的な懺悔、告白、打ち明け話をやってみせたのがルソーの腕前という事だと思えます。そういう宗教的な懺悔というものは、仏教にもあるのですが、キリスト教の様な形でこれが制度化したり、大きな流れにはなりませんでした。

二番目は、世俗的な問題になりますが、西洋の自伝の大きな特色は、公的業績を表に立てたものが古くからあるということです。これはローマのカエサルの『ガリヤ戦記』などがその典型ですが、その少し前の、イスラエルの将軍ヨセフスが書いた自伝もそうです。彼はいわば国を裏切って、ローマに逃亡し、しかもローマでは非常に手厚い待遇を受け、戦争の歴史などを悠々

と書いていた。全くユダヤ人の風上にも置けないという風にユダヤ人の間でひどく憎まれた訳ですが、実はいかに戦争に反対したのにそれが起ってしまったか、しかもその中で自分がいかに奮戦し、ついには捕虜になるに至ったかということ述べて棄明記の自伝を書き残した訳です。しかも、ヨセフスはみごとな文章力の持ち主で、彼の書いた戦記並びに自伝を読むと、彼の立場は、我々後世の読者としては実にうなづけるところがある。彼はちっとも悪い人ではなかったと、私なんかは思っております。

こういう自伝伝統は脈々と通じまして、チャーチル、或はドゴールの政治的回想の自伝に迄続く訳です。さらに最近ではキッシンジャーさん、ニクソン、皆本になると大いに売れました。それに比べますと日本の場合、例えば私が先程あげました松平定信のものなどを考えると、彼は、田沼意次の後に出て、腐敗した田沼政治を大いに肅正した訳で、そういう政治的業績を書いても当然だと思うのですが、それは殆ど語られていないのです。侍女との、ちょっと面白い冒険や、自分の内面生活、性生活といった事はたっぷり書き残しているのに、政治上の業績は、殆ど全く触れないのです。そして彼の自伝の名前が又、『字下人言』、「うげのひとこと」と普通読み慣わしていますが、これはいったい何だろうと思っていろいろ考え巡らしていたら、はたと思い当たったのがアナグラムで、定信という字を分解した訳です。自分の名前にこれ程の強い自意識を持っていたのです。西洋のいろいろな自伝を眺めてみても自分自身の名前にこれ程執着して、名前自体を分解して洒落みたい自伝の題にするというのは、相当に sophisticated self-consciousness だと思います。しかもそれが立派な自伝になっている訳です。これも東と西との大きな違いの様に思います。

三番目は大変大きな難問で、これは皆さんにむしろ問題として差し上げたいのですが、いったい個人、或は ego というものをどの様に価値判断していたのか。個人観というか人間観は、東と西でどの様に違うのだろうか、という問題です。

これは西洋では、種々の本が書かれているのですが、日本の場合に、日本人の個人意識、自我意識というのは、昔からずっとどうだったろうかという問題は、実は殆どまだ明らかにされていないと思うのです。例えば平安朝は自伝が輩出したのだから自我意識が強かった、個人意識が強い時代であったか、という、とてもそうは言えません。江戸時代についてもそうです。そうすると、ego 或は個人という事についての日本人の考え方に、独特のものがあるのではないか、仮に英語で考えますと、personal, impersonal という組合せですが、日本人の personal なものについての関心は、その裏側に、impersonal なものへの憧れ、或は希求を秘めている様に思われるのです。

一方では日本人は平安朝以来、いまだに日記が大好きで、もう少しして今月の末位から、本屋へ行ってごらんになると、日記が山と積まれていて、実は二、三日でやめてしまう人も多いらしいけれど、とにかくその売れ行きからいけば、世界に冠たる日記愛好国である訳です。

それでいて一方外人から見ると日本人は、group animal だか economic animal だか、とにかく集団行動が得意だと言われていて、確かにそういう一面も否定できません。

この様に一方で personal なもの、private なものに執着しながら、よその国の人からは selfless という風に見られるという逆説は、いったいどういうことなのか。private emotion に非常に強く執着するのだけれど、その反面やはり個人というものは、これは仏教や、いろいろな影響があるでしょうけれど——結局ははかないもので、人生もそんなに執着してはいけないという、はかなさ、空しさの意識が、執着と重ね合わせになった一種の二重感覚として、平安朝以来ずっと我々の中に生き続けているのではないかと思います。

日本の近代文学でも、私小説というものは、案外に西洋の私、あるいは個人主義的小説と比べると、いかにも淡くて、むしろ自然とか他人とか、周りの家庭とか、そういうものの方が鮮やかに印象に残る場合が多い訳です。私小説という名前がつきながら、それ程、ego そのものの強烈な形の定着は成さ

れていないという様な問題にもつながって来るだろうと思います。

最後は、自伝ジャンルと現代との関係です。私は東と西とのいわば対立点、相違点を意識的に強調して申し上げたのですが、現代の観点から考えますと、むしろ東と西との間の熔融が起こりつつある。或は自伝衝動と言いますか、自己表現の衝動は、もう非常に広く世界的に瀰満して来て、現在では殆ど自伝インフレの時代といった観があるのです。ですから現代ではむしろ共通性を語るべき時になって来たらしいという認識が増して来ています。これは、西欧化、近代化が世界を覆って来て、さらにいわゆるテクノロジーの発達という事があり、生活条件その他での差異が急激に消滅しつつあるという社会的というか、物質的な条件が基本にあると思います。面白い事に、日本でも高度成長といわれる様な、テクノロジーが一般に広がった1960年代以降に自伝ブームという現象が広く起こって来たように思われます。特にこれはアメリカの場合に非常に鮮かで、アメリカの女流自伝、それから、ethnic autobiography と呼びますか、少数民族、例えば、黒人による自伝がいっぱい出ましたし、ユダヤ系の自伝は言う迄もなく膨大な数です。その他にメキシコ系、さらに日系、中国系の人も自伝を書き出して来た訳です。

それからもう一つの大きな要素は、自伝というのは、私なども読み出したのは50歳になってからで、60代になっていよいよ面白がっている次第ですが、若い世代には余り人気がないものでした。しかし近頃どうもそうではなくなった様です、老人の占有物だったのが、そうじゃないらしくて、現に例えばある週刊誌に『早過ぎた自伝』というものを若い女優さんが毎週書いています。しかしこの『早過ぎた自伝』という発想は面白いことに、元元のロシア語の題はわかりませんが英訳では“premature autobiography”と言い、これを書いたのはソビエトの詩人の、エフトゥシェンコです。そういう訳で、若い詩人が、逸早く自伝を書く、早過ぎると知りながらも自伝を書くというのは、洋の東西、今度はもう体制の東西を問わない現象になりつつあると思

われます。

そこで思うに、現代はもはや、小説の世紀ではなくて、自伝の世紀ではないかと申し上げたいのです。これは西洋について特に著しい事ですが、十八世紀は、散文が、先程も御説明があった様にいろいろな所に広く使われるようになった時期ですが、十九世紀になると、散文の王様が小説という事はほぼ紛れもない事実となり、小説にとって「黄金の世紀」はやはり十九世紀であろうかと思うのです。ところが二十世紀になると、今や大小説家は誰だろうと言っても、なかなかみつからないという様な状態で、小説の時代は過ぎかけて来ているのではないか、しかも自分が identity を求めるという動きが国際的に広がって来るばかりであるという事態を眺めると、どうもこれは自伝ブームが、アメリカや、ある意味では日本ばかりだけではなくて、殆んど普遍的現象と言っても良いのではないかという気がするのです。

そこでもう一つ、そういう現象の文学的背景として申し上げたいのは、現代は東と西との間に熔融現象が起こっている様に、文学諸ジャンルの間にも熔融現象が起こって来て、少なくともジャンルの古典的区別が歪み始めている。自伝の場合、それ自身もいろいろ変化して来まして、宗教的自伝があつて、それが世俗化するというのが十八世紀ですが、その後十九世紀になると、詩や小説の中に、ヨーロッパ文学の場合は濃密な形で自伝的証言衝動が広がって行った訳です。ところが二十世紀に入ると、自伝を書くのに小説や詩の形をとらず、そのままぶっつけて自伝を書く。しかもそれは専門の作家ばかりでない人々の間にも大きく広がって来たのです。そうなると、ジャンルの別が揺らいで来たという事になる訳です。さらに面白い現象としては、自分の属していた文化の中から別の文化の中に入って行って暮らす一種の cross-cultural の様な暮らし振りをするという事は、例えば十九世紀から二十世紀の始めですと、小泉八雲などに代表される訳ですが、そういった事は現在では極普通になって来て、そういう体験を書く人が随分ふえても来ました。

もう一つ自伝が盛んな事の補助要因として申し上げたいのは、先程も触れたテクノロジーの発達で、我々の生活様式、着ている物から食べる物から見る物迄が、段々世界的に規格化されて似かよって来るという事態になると、別のリアクションが起こるのではないかと思うのです。

そのリアクションを三点に絞って考えると、一つは反規格、アンチ普遍とかローカルなものへの指向です。日本では故郷指向などと言っていますが、これは国鉄の宣伝も大分あるらしいけれども、とにかくローカルなものというのは、何となく良いらしくて、若い女性達も、高山の町へ出かけて行ったり、津和野へ行ったりいろんな所へ出かけて行くという現象が、氾濫しています。もう一つは、一種のプライベートな志向と言いますか、つまりライフスタイルといったものは、十九世紀などには詩人や芸術家の独占物でありました。暮らし振りまでも、作家風なものにする、作家というものとはにかく変わった事やってみせる、生活実験者でもあったのです。ところが現代では、それが皆一般にはやってしまったらしく、服装、旅行その他の点で、十九世紀ではボードレールやドストエフスキーのみがやった様な事を、今では誰でもする、というのが現代のライフスタイルになりつつあります。すると、当然そういったライフスタイルは何らかの表現定着を求める、というのが自伝が盛んになるもう一つの要因でしょう。三番目には、テクノロジーの発達で、情報の氾濫という事もあるのですが、刻々速い速度で流されているという実感が起こって来ると、それに対して何かのルーツを求めようという衝動も、逆に起こって来る訳です。過去や伝統を、長い perspective でとらえたいという希望が生まれて来ます。ethnic なものへの強い関心は、これと関係があるのではないかと思うのです。私は自伝ファンだし、自伝読者ですから、自伝に身最戻し過ぎるのかとは思いますが、このように自伝問題は、東と西という問題ばかりでなく、現代の人間にとっての、非常に切実な文化問題であり、文学問題である、という事を最後に申し上げて少々急ぎすぎの私の話を終わらせて頂きます。